

『赤毛のアン』から『花子とアン』へ —『赤毛のアン』出版100周年と村岡花子リバイバル—

荒 木 陽 子

はじめに

作者の陰に隠れがちな文学作品の翻訳者が、読者の注目を浴びることはすくない。しかしながら、ルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942) の小説、『赤毛のアン』 (*Anne of Green Gables*, 1908) の翻訳者として知られる、村岡花子 (1893-1968) はこの例に当てはまらない⁽¹⁾。『赤毛のアン』出版100周年の年に出版された、孫の村岡恵理による村岡花子の評伝『アンのゆりかご』 (2008)⁽²⁾、そしてそれを基に制作され、日本放送協会が放送した朝の連続ドラマ『花子とアン』を中心とする露出によって⁽³⁾、生前は翻訳者としてではなくラジオパーソナリティ、活動家として表に出ることも多かった村岡花子が、長い沈黙を経て再び表舞台に引き出されたからである。本稿は、『赤毛のアン』出版100周年に前後して起こった様々な文化現象、特に2008年から2014年の間に起こった『赤毛のアン』から村岡花子への注目の推移に着目し、『赤毛のアン』の翻訳家や関連作家への影響力についても考慮しながら、『赤毛のアン』が日本で未だに保ち続ける「ちから」の一端を明らかにする。

ここ日本において、『赤毛のアン』出版100周年期とそれに続く数年間には、モンゴメリやアンに関連するイメージが、観光業や文化産業を中心に様々なビジネスによって頻繁に利用された。すでに故人であり、残された遺産を通してイメージとしてのみ存在する『赤毛のアン』の翻訳家、村岡花子はその代表格である。筆者は2008年の時点で、死後40年が経過していた村岡花子の作品と人生の再評価は、このアン関連ビジネスの一端として行われたものとする。チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) や、マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) をはじめとして、文学的にはより評価が高い作家たちも翻訳している村岡花子への注目が、モンゴメリとの関連性のなかで再評価されていく事実は、21世紀の日本において、未だ『赤毛のアン』やモンゴメリが失うことのない文化的な影響力を浮き彫りにする。そこで、本稿は、いかにモンゴメリ、そして彼女の創造したキャラクター「アン」が、その翻訳家である村岡花子、そして松本侑子や村岡美枝などの後続の翻訳家、そして作家の村岡恵理に注目をもたらしたのかも検討していきたい。

I. 『赤毛のアン』 出版100周年とその他アニヴァーサリーの連動

1. 日加修好80周年とアニメーション『赤毛のアン』 放映30周年

まず、『アンのゆりかご』や『花子とアン』に触れる前に、それらが出版・放映された背景を知るための手がかりとして、日本における『赤毛のアン』出版100周年期の多様な現象を概観したい。それは、本章が以下に示す通り、文化産業にかかわる者たちが、『赤毛のアン』とは直接関係のないものも含めて、複数のアニヴァーサリーを、『赤毛のアン』という文化産物に結び付け、経済的利益を求めていく様を追う作業になる⁽⁴⁾。

実は、日本における『赤毛のアン』出版100周年は、小説の出版記念としてのみ祝われたわけではない。2008～09年にかけては、他にも様々な『赤毛のアン』に関連する「アニヴァーサリー」が祝われていた。まず、日本とカナダは近年ほぼ5年毎に修好記念行事を執り行っているが、この頃、両国は日加修好80周年を迎えていた。特にこの修好80周年は、日本がカナダに大使館を開設したのが1928年、カナダの日本における大使館の開設がその翌年であったため、年をまたいで祝われ、様々なイベントが催された。加えて、1979年に放映され、現在まで人気を博するアニメーション『赤毛のアン』も、2009年に放映30周年を迎えていたのだ。

特に、カナダ連邦政府および州政府は、これを日本に商品売り、観光客をカナダへと送るための商機ととらえ、大使館等が主導する行事に『赤毛のアン』関連のイベントを組み込んでいった。その代表的な例として挙げられるのが、カナダ大使館のE・H・ノーマン図書館スピーカー・シリーズの一つとして、2008年4月25日に開催されたイベント「赤毛のアン出版100周年：アンの世界」であろう⁽⁵⁾。同イベントには、前年日本放送協会が放映した『風の少女エミリー』の時代考証を担当したモンゴメリ研究者赤松佳子⁽⁶⁾、劇団四季のミュージカル『赤毛のアン』で、アン役を演じる吉沢梨絵、モンゴメリそしてアンの故郷であるプリンスエドワード島の写真集の出版を控えた写真家吉村和敏⁽⁷⁾、そして姉の村岡美枝が祖母村岡花子の訳した「アン・シリーズ」に改訂を加えた新装版を出版し、本人も数か月後に『アンのゆりかご』の出版を控えた村岡恵理が、「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫主宰者」の肩書で登場している。このようなアンに関連する文化人や文化産物を多分に起用した大使館広報活動は、出演者側、企画者側の双方に利益があるため有効である。

カナダ大使館はその後も数々のイベントを企画しているが、特に目立つのがアン関連の映像の試写会である。大使館では、翌2009年4月には、出版100周年事業のひとつとして、バッジ・ウィルソン (Budge Wilson) が執筆した『赤毛のアン』の続前編『こんにちはアン』 (*Before Green Gables*) のアニメーション版『こんにちはアン～Before Green Gables』⁽⁸⁾、2009年10月には『赤毛のアン』出版100周年記念映画として日加共同で制作された映画『ア

ンを探して Looking for Anne』⁽⁹⁾、そして2010年には前年放映30年を記念してアニメーション版を劇場公開用に編集した『赤毛のアン：グリーンゲーブルズへの道』の試写会を行っている⁽¹⁰⁾。これらの試写会は、2008年に大使館で催された「赤毛のアン出版100周年」のイベントと同様の趣旨のもとに行われたものであろう。

さて、ここで前掲の大使館主催のイベント「赤毛のアン出版100周年：アンの世界」に話を戻したい。というのは、イベントにおいては、『赤毛のアン』との関連性が拡大解釈された様々なカナダの文化や産物を、デパートにおける関連商品の販売というより直接的なビジネスと結びつける行動が見られた点があるからである。同イベントでは、同年6月から約一年間にわたり、しばしばカナダ物産展と併設される形で、国内の百貨店を巡回して行われた「赤毛のアン展：モンゴメリが愛したプリンス・エドワード島」の開催がプレスリリースされた。この展示の後援にはカナダ大使館、カナダ観光局、プリンスエドワード島州政府観光局、アトランティック・カナダ4州観光局、そして日本の外務省までが名を連ねているのだ⁽¹¹⁾。ただ、日本の外務省および政府関係機関は、カナダ大使館企画のイベントの後援者に名前を連ねる一方で、日本国内で特に大きな『赤毛のアン』関連のイベントを催してはいない。

しかし、日本の公共放送を担う日本放送協会は、この『赤毛のアン』100周年期に『赤毛のアン』関連のイベントを企画し、関連商品を販売した。『赤毛のアン』のアニメーション版はフジテレビ系列で放送されていた⁽¹²⁾。しかし、その放映10周年を迎えた1989年にはNHK取材班が『赤毛のアン・夢紀行：魅惑のプリンス・エドワード島』を出版するなど、折に触れて『赤毛のアン』人気に関連する動きを見せてきた⁽¹³⁾。しかし、この100周年期を機に、日本放送協会の『赤毛のアン』の利用は勢いを増していく。特に、女優松坂慶子と作家でアン・シリーズの翻訳も手掛ける松本侑子を配し、プリンスエドワード島現地収録の映像を多分に配した3か月トピック英会話『赤毛のアンへの旅』は、テキスト類の他、写真集等の様々な派生商品を生んだ⁽¹⁴⁾。そして、関連会社のNHKプラネットが、前述のデパート巡回展示会「赤毛のアンの世界」の主催者に名前を連ねていることもここに記されるべきであろう。後年の日加修好85周年期における『花子とアン』(2014)の企画の背景には、2008～09年頃のこれらのアン関連の企画の成功が影響しているであろう。

2. 村岡花子の孫たちと花子没後40年

「赤毛のアン出版100周年」とともに、またその文脈上に位置づけられることで、人々の注目を集めていった事象はこのほかにもある。それこそが、前章で言及したドラマ『花子とアン』の花子のモデルとなった、村岡花子をめぐる彼女の孫姉妹たちの活動である⁽¹⁵⁾。前述のとおり、この年、かつて三木美枝の名義で活動していたこともある翻訳家の孫の村

岡美枝は、前述のとおり、20世紀半ばに花子が訳した「アン・シリーズ」の書籍を改訂し、元雑誌編集者の村岡恵理は花子の評伝『アンのゆりかご』を出版した。2008年は、彼女たちにとっては、『アンのゆりかご』のエピローグのタイトルに明言されているように、1968年に死去した村岡花子の没後40年でもあった。一般的には区切りとして用いられることの少ない「没後40年」に、村岡花子の業績の再評価が行われたのは、彼らが村岡花子の業績への注目を、より知名度の高い『赤毛のアン』の出版100周年記念事業と結びつけることによって高めようとした結果といえよう。このふたりは、村岡花子ゆかりの地に「イングルサイドハウス大森」とアンを意識した名称で建てられた賃貸住宅の一階に、花子の蔵書や書斎を移築した「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」を主宰していた。彼女らは母みどりが始めたこの事業を引き継ぎ、比較的近年まで一般に公開していたこともあり、この時期以降、しばしば赤毛のアン関連のイベント等や出版物への露出が行われるようになる。

ふたりが祖母の業績を次世代に伝えようと個人で記念館を続けたことは、それ自体が偉業である。ただ、村岡姉妹が自身をより知名度の高い文筆業者である祖母と、そして祖母と「アン」とを結び付けることによって、自らをアンと結び付けたことは無視できない。既に翻訳家として若干の業績のあった村岡美枝は2012年に邦訳が出版された『アンの思い出の日々』(*The Blythes are Quoted*, 2009)の翻訳の依頼を受けた背景には、『赤毛のアン』出版100周年期に行った祖母の作品の改訂があったことを語っている⁽¹⁶⁾。また、元雑誌編集者の村岡恵理は、『アンのゆりかご』を出版し、さらにそれをテレビ・ドラマ化した『花子とアン』に起因する村岡花子への注目度の高まりから、後述する村岡花子関連のムック等の執筆・編集も行うことで文筆業者としてのキャリアを積んでゆく。それゆえに、村岡花子や彼女が翻訳を通して日本に紹介した「アン」は、よい意味で村岡の孫たちのキャリア発展の「踏み台」としても機能しているといえよう。

II. 村岡花子リバイバル計画の下地：村岡訳『赤毛のアン』出版50周年

ただ、次章で詳細する『花子とアン』の放映に前後して、顕著となる村岡花子リバイバル計画は、前章で注目した『赤毛のアン』出版100周年期に、急にはじまったものではない。今世紀に入ってからは、1952年に三笠書房より出版された村山訳『赤毛のアン』が、出版50周年を迎える2002年頃、その動きが顕著となっていた。この頃、トロントの日本財団イベント・ホールにおいて、トロント大学のソニア・アーンツェン (Sonja Arntzen) とセント・フランシスコ・ザヴィエル大学のクレア・フォーセット (Clare Fawcette) を演者として「キンドレッド・スピリッツ：日本における『赤毛のアン』の遺産」(2012年10月26日)という学術シンポジウムが行われ、その中で村岡の業績が再評価されていた⁽¹⁷⁾。

一方で、日本では村岡訳出版50周年に、村岡美枝と同世代のもう一人の翻訳家が『赤毛のアン』との関連性を強化することで、そのキャリアを推し進めていた。2008年にも『アンの愛情』の注釈付き新訳を出版したり⁽¹⁸⁾、前述の英会話番組のホストを務めるなど、アン関連の活動が目立った松本侑子である。1987年にすばる文学賞を受賞し、作家活動をはじめた松本侑子は、自身の小説やエッセイの一方で、現在まで多数のアン関連の雑誌連載や書籍を出版し、赤毛のアン関連の英語講座や海外ツアー・ガイドも務めてきた⁽¹⁹⁾。

1980年代末に作家としてのキャリアを始めた松本の赤毛のアンをめぐる活動は、早くも1990年代初頭に表面化していた。彼女は絵本専門誌『MOE』1992年4月号のモンゴメリ没後50年記念企画(1992)に「古びない少女像」と見出しのついた短い記事を寄稿し、同年から翌1993年にかけて、『すばる』誌に『赤毛のアン』関連の連載を行っていた⁽²⁰⁾。

また、1993年には注釈付きの『赤毛のアン』の新訳を出版するが、この活動は21世紀の村岡花子訳『赤毛のアン』出版50周年(2002)に向けた彼女の活動につながっていく。モンゴメリ没後50周年に出版した新訳『赤毛のアン』を2000年に改訂・文庫版化した松本は、同年エッセイ『誰も知らない赤毛のアン』、2001年に『アンの青春』の注釈付き新訳、エッセイ『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』、『赤毛のアン』の今日が幸せになる言葉：Anne Makes You Happy』、そして2002年に『アンの青春の明日が輝く言葉：Anne Makes You Happy』をたて続けに出版する⁽²¹⁾。

このように、日本における『赤毛のアン』翻訳出版50周年企画は、どちらかといえば文学的な動きであり、露骨なメディア露出というかたちで村岡花子への注目を上げることはなかった。モンゴメリ没後50年時も同様の傾向であり、村岡姉妹の母であり、村岡花子の娘である村岡みどりも、母について語る小さな記事が雑誌に載っている程度だ⁽²²⁾。そして、興味深いことに、後に「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」と紹介されることになるこの大森の記念館は、この時点ではまだイングルサイドハウス大森への移築前であり、前述の『MOE』誌の特集では、単に「赤毛のアン記念館」と紹介されている。このことから、特集記事はあくまで村岡花子を「『赤毛のアン』の訳者」として紹介しているものであり、当時は村岡花子自体への注目がそれほど高くなかったことは事実だ。この時期の出来事は、『赤毛のアン』出版100周年におこる『赤毛のアン』の再評価と、それに伴う村岡花子への注目の高まりに対する地固めであったと考えてよいであろう。

Ⅲ. 「アン」から「花子」への過渡期：

花子生誕「120周年」と日加修好85周年に向けて

『赤毛のアン：グリーンゲープルズへの道』の劇場公開の後、翌2011年頃まで『赤毛のアン』再評価の動きは一時的に鈍化する。この時期、次にカナダ大使館とのタイアップが期

待できる日加修好85周年（2014）まで、『赤毛のアン』、そしてその翻訳家村岡花子への関心を保つべく、村岡美枝、恵理姉妹は自らの作品を刊行してゆく。2011年には村岡恵理が当初マガジンハウスより出版されていた『アンのゆりかご』を、祖母のアン・シリーズ訳と同じ新潮文庫として再版。それにつづき、村岡美枝は祖母の死後に出版された、モンゴメリ晩年の作品集『アンの思い出の日々』を翻訳し、同様に新潮文庫として出版した。

注目すべきは、その翌年2013年からの動きであろう。この年『村岡花子と赤毛のアンの世界：生誕120年』と題されたムックが村岡恵理の監修の元に出版される。このムックの表紙右上には「生誕120年永久保存版」と書かれたピンクのロゴが見いだせる⁽²³⁾。このとき、我々は、初めて村岡姉妹の2011～12年の動きが、2014年の日加修好85周年のみならず、2013年の「村岡花子生誕120周年」という、もう一つのアニヴァーサリーに収束していったことを知ることになる。2009年に公開された『アンを探して』のDVD化がこの年行われたのは、「村岡花子」再評価に伴う『赤毛のアン』への再注目の動きを追随するものであろう。

村岡姉妹の文筆業者、そして祖母からの文化遺産の管理者としての手腕はもちろんのことであるが、ふたりの商機を逃がさないビジネス・パーソンとしての力も認められるべきであろう。この時期の彼らの行動は、ふたりが時折イベント等で共演する、モンゴメリ関連の文化遺産や著作権等を管理する株式会社 L.M.モンゴメリの相続人（Heirs of L.M. Montgomery）の代表である L.M.モンゴメリの孫娘、ケイト・マクドナルド・バトラー（Kate Macdonald Butler）を喚起させる。日本の文化産業に再び目を向けると、『赤毛のアン』から「村岡花子」への「商品」のすり替えが本格化するのには、この2013年である。この年の6月、日本放送協会は、村岡恵理の『アンのゆりかご』を原案とし、中園ミホの脚本により、2014年3月より放映予定の朝の連続ドラマ『花子とアン』の制作を発表した⁽²⁴⁾。

ところで先ほどから、2014年は日加修好85周年であったことに言及してきたが、このアニヴァーサリーも、村岡花子生誕120周年同様に、区切りとしては若干不自然である。しかし、当時執り行われたイベントの広告等は、高らかに85周年を祝うロゴを記している⁽²⁵⁾。2008年と同様に、カナダ大使館は再び2014年5月21日にバトラーを迎えたイベントを行い⁽²⁶⁾、日本の外務省とともに3月から11月にかけて全国のデパートや美術館で行われた展示「モンゴメリと花子の赤毛のアン展——日本とカナダをつないだ運命の一冊」の後援者として積極的に関与してゆく。ただ、時にバトラーや村岡恵理が登場し、恵理のサイン会や講演会が開催されることもあったこの巡回展示のポスターの図柄の中心は、モンゴメリと花子という実在の人物の名前が展示の主題に入れられているにもかかわらず、やはり「プリンスエドワード島のアン」であった⁽²⁷⁾。2009年に放映された『こんにちはアン』のエンディング・テーマに協力者としてカナダ大使館、カナダ観光局、ノヴァスコ

シア州政府観光局、エアカナダとともに名前を連ねていたプリンスエドワード島州政府観光局は、この巡回展示のみならず、『花子とアン』番組冒頭の主題歌の画面でも、山梨県や同県の甲府・韮崎両市とともに、撮影協力として名前を連ねている。そのかいあってか、『赤毛のアン』出版100周年期から2014年までの間に、再版も含め数多くのプリンスエドワード島観光ガイドブックが書店に並ぶこととなった⁽²⁸⁾。

IV. 村岡花子の再評価：『赤毛のアン』の翻訳家というラベルとともに

2014年に入ると、『花子とアン』の放映に合わせるかのように、河出書房新社より2月から7月にかけて、村岡花子の3冊のエッセイ集、『想像の翼にのって』、『腹心の友たちへ』、『曲がり角のその先に』、そして童話集『たんぼぼの目』が出版される⁽²⁹⁾。村岡のエッセイであるにもかかわらず、エッセイ集のタイトルはいずれも、『赤毛のアン』の第4、8、および38章等に登場する言葉である。またこの年は、村岡恵理が編集ないしは執筆にかかわった、『村岡花子の世界：赤毛のアンとともに生きて』、『アンを抱きしめて：村岡花子物語』、『「赤毛のアン」と花子：翻訳家・村岡花子の物語』をはじめとする、村岡に関する書籍も多く出版されているが、そのいずれのタイトルにも「アン」の文字がみられる⁽³⁰⁾。ここからも、村岡花子の再評価が村岡単体への注目から成り立つものではないことは明らかである。

1. 『アンのゆりかご：村岡花子の生涯』

ではここで『花子とアン』を検討する前に、その下敷きとなった、村岡花子の評伝『アンのゆりかご：村岡花子の生涯』において、村岡恵理が花子の生涯の再構築する際にとった戦略を『赤毛のアン』との関連性に注目しながら概観していきたい⁽³¹⁾。筆者がここで注目したいのは、この作品の少し考えると不思議なタイトルである。この書籍は村岡花子の評伝でありながら、村岡の名前がサブタイトルにまわり、彼女の訳した数多くの小説の中の一登場人物に過ぎない「アン」の名前が、タイトルの前面に出てきているのである。そして、「ゆりかご」という言葉も、彼女の故郷の甲府や人生の大半をすごした東京のイメージではなく、「連邦のゆりかご」(the cradle of confederation)の異名を持つ、アンの故郷プリンスエドワード島のイメージを喚起する。この書籍が2008年の『赤毛のアン』100周年に出版されていることも考えると、この作品を通して村岡恵理が花子と「アン」のつながりを強化させようとする、強い意志がうかがえる。

内容面でもしかりだ。実は、村岡花子は400以上の作品を翻訳したといわれているが、そのうち、モンゴメリの小説は16作品に過ぎない⁽³²⁾。そして1939年にニュー・ブランズウィック州出身で教文館の同僚であったロレッタ・レナード・ショー (Loretta Leonard

Shaw) からもらい受けて、第二次世界大戦中に翻訳をはじめた『赤毛のアン』を除いて、その翻訳のほとんどが、1952年の『赤毛のアン』翻訳出版後の晩年に集中している。そのため村岡の70年を超える人生を、アンやその生みの親であるモンゴメリとの関連性の中に位置づけて物語る為には、並みならぬ創意が必要となる。

そこで、村岡恵理は伝記の最初と最後に、村岡花子がモンゴメリの作品を翻訳する場面を作り出し、物語全体をフレーミングする手法を用いる。作品中、村岡の人生は基本的には、時系列に沿って再構築されていく。ただ、例外的にその冒頭のプロローグは、花子の生まれた19世紀末の山梨県ではなく、彼女が後に『赤毛のアン』と題されることになる書籍*Anne of Green Gables*を、1945年の戦禍の東京で翻訳する場面からはじまる。そして、第一章で改めて、彼女の甲府における経済的には豊かとはいえない生活の描写へと逆戻りする構造になっているのだ。この冒頭における操作は、作品の最終章でモンゴメリ作品を訳し終えて間もなく村岡が急死する場面と呼応している。このフレーミングは、現実と反して、村岡が人生全体を通してモンゴメリやアンと関わっていたような印象を読者に与える効果をもつ。

また、他にも村岡恵理による花子の人生の再構築には、花子の人生をアンやモンゴメリのそれと結びつけるような書き方が目立つ。冒頭の場面に続き、安中はな（村岡の結婚する前の本名）が一家とともに東京に転居したのちに、花子が家族と離れ、裕福な学生が主流であった東京の東洋英和女学校で給費寄宿生として、孤独な学生生活を始めたことが描かれる。このような花子の幼少期の性格づけも、両親を失い、家事手伝いを担う里子として生活した後に孤児院経由で、故郷から海を隔てたプリンスエドワード島のカสบート一家の養子となり、物質的にはしばしば裕福な友人ダイアナを羨むこととなるアンと重ねられていると考えられる。また、続く第三章では、タイトルに村岡訳『赤毛のアン』に登場する「腹心の友」(bosom friend) という言葉をあて、複数存在していたであろう友人の中から、あえて後の歌人柳原白蓮に注目して、親友関係を再構築したのも、アンとダイアナとの関係を意識してのことであろう。

また第三章までに、友人関係のみならず、女学校においてモンゴメリと同世代のカナダ人女性宣教師から施された花子の教育を強調している点も、第八章において再びプロローグで描かれた戦時中『赤毛のアン』を訳しながら、「アンをとりまく文化や学校生活は、花子の寄宿舎生活とあまりに似通っていた。……物語の随所に花子が親しんできた詩や文学がちりばめられていた」と、物語に描かれた世界にかつて受けた教育との類似性を見出し、思いをはせる花子の姿につながるように工夫されている⁽³³⁾。

先に花子と『赤毛のアン』の、直接的な関わりは人生の半ばすぎにはじまることを指摘した。従って、村岡恵理が第三章75頁において『赤毛のアン』の出版年を挿入する際も、

少女時代の花子はまだ『赤毛のアン』を認知すらしていなかったもので、唐突にならざるを得ない。そして、この75頁の後、『赤毛のアン』への直接の言及は、第八章270頁においてカナダに帰国するショーから『赤毛のアン』を受け取る場面まで起こらないのである。これほど長い間『赤毛のアン』への言及が行われていないことを、頁数の形で改めて見ると、それにも関わらず読む者に不自然さを感じさせない村岡恵理の作家としての卓越を感じざるを得ない。では彼女はそのためにもどのような手法をとっていたのであろうか。

村岡恵理は、花子の人生においてアンやモンゴメリが不在の間も、幼少期の詩作への関心、少女時代の友人との関係、若き作家としての野心、出版業界での仕事、故郷である田舎町における教職、家庭の生計を支えた作家生活などの二者、時に三者に共通するトピックを選択し、物語中に隈なく織り込むことにより、村岡花子の人生を、モンゴメリやアンのそれにつなげることを可能にする⁽³⁴⁾。そして、花子が『赤毛のアン』をもらい受ける場面に達すると、村岡恵理は花子の体を借りて、戦争で荒廃した東京と、花があふれる田園的なプリンスエドワード島の風景を、以下の通り見事に対比して見せる。

モンゴメリの原文と描かれている情景のみずみずしさは、高圧的で乱暴な日本語ばかり聞かされていた花子の魂を浄化する。……

頭の中には物語の舞台であるプリンス・エドワード島の、花の咲き乱れる美しい光景が広がる。モンゴメリによって書かれたロマンティックなアンの言葉が、花子を通してリズムカルで美しい日本語に紡ぎだされていった⁽³⁵⁾。

そして、第八章に続き、花子の晩年を描く最後の二つの章においては、花子とアン、エミリー、そして二人のキャラクターの創造主であるモンゴメリは、切れることなく結ばれつづける。『『赤毛のアン』ついに刊行』と題された第九章において描かれる、戦後の出版社探しの苦労は、やはりモンゴメリ自身が出版社を求め、母国ではなくアメリカで原作を出版するに至る苦労と重ねられているであろう。そして、「モンゴメリへの共感」と、見出しを与えられた伝記の終幕部に至ると、村岡恵理は祖母とモンゴメリの人生を重ねて語ろうとする自らの意図を次のように明言するのである。恵理が二人の類似性を列挙する、重要な箇所なので少し長いが引用する。

また、モンゴメリの人生観そのものに花子は深く共鳴していた。

モンゴメリは『赤毛のアン』の出版で、マーク・トウェインやキプリングから賞賛を浴びるほどの人気作家となったが、自分の育ててくれた祖母の看病のため、村に留まり、郵便局の仕事を続けた。祖母を看取り、37歳でユーアン・マクドナルド牧師

と結婚した後も、女性の地位向上のために縦横の活躍をしながら、執筆を続けた。その一方で牧師の妻として、2児の母としての役割も怠らなかった。……

花子には、モンゴメリの、文筆にかける夢と、実生活で果たすべき責任の狭間での葛藤かっとうが痛いほどわかる⁽³⁶⁾。

2. 『花子とアン』

日加修好85周年の2014年に放映され、前述の様々な展示会等を含め商業的タイアップを生み出した、日本放送協会の朝の連続ドラマ『花子とアン』は、前節で紹介した『アンのゆりかご』をベースとして制作されたテレビ・ドラマである。『花子とアン』というドラマのタイトルは、この時期に至りメディアが視聴者の注目を向けようとする焦点が、日加修好80周年とリンクして出版100周年やアニメーション化30周年が祝われた『赤毛のアン』から、翻訳家の村岡花子へと移ったことを示す。

しかし、アンの名前は依然としてタイトルから消えていない。ここで、『赤毛のアン』とそれにまつわるイメージは、現在を生きる朝の連続ドラマ視聴者にとって、なじみの薄い明治生まれの翻訳家村岡花子と彼らを結び付けるために、最大限活用されることとなる。脚本家の中園ミホは、ドラマの視聴者にとって、より分かりやすく、面白く村岡の人生を語りなおすべく、伝記に描かれた村岡花子の人生に様々な改変を加え、村岡恵理がほのめかした花子と小説の中のアンとの類似性のみならず、花子とアニメーションのなかで描かれたアンとの類似性を含めて、それをさらに強調する方向へ向かう。

特に花子の幼少期を描くドラマ第一週目では、『アンのゆりかご』には、あまり描かれていない、花子の甲府における幼少期が大幅に拡大されて描かれている。実際には花子は5歳で東京に引っ越したが、ドラマにおいては10歳で東京の寄宿舎に引っ越すという設定に変更されている。これは、故郷を離れる際の花子の年齢を11歳で故郷ノヴァスコシアからプリンスエドワード島に移動したアンに近づけるための方策であろう。また伝記によれば「花子」というペンネームは女学校時代に使い始めたものであったらしいが、彼女の名前へのこだわりが、甲府時代にすでにあらわれる設定は、若いアンが自分の名前のスペルがAnnではなくAnneであることにこだわっていたことへの言及であろう。

加えて、甲府での生活が、実際には茶商人の娘であった花子が、行商人の父を持ちながらも、町の中心部からはなれた山間部の農村に生活する農家の娘のように描かれている点も、ジャニス・フィアメンゴ (Janice Fiamengo) が、世界中のどこにでも適合可能な「ポータブル風景」(228) であると指摘する、町から遠く離れたエイヴォンリーの農場で生活するアンに似せるためであろう⁽³⁷⁾。『アンのゆりかご』では、戦時中の無残な東京と田園的なプリンスエドワード島が対比されていたが、テレビ、特にその主題歌のバックグラウ

ンドでは甲府とプリンスエドワード島の田園地帯が重ねられている。

さらに、『アンのゆりかご』では登場しない母方の祖父周造は、『赤毛のアン』に登場するアンの理解者であるマシューを、『花子とアン』の中に作り出すために、新たに創造された人物であり、その「周」(シュウ)の音もマシューの名前にちなんだものであることが、同ドラマのスタッフのブログで明かされている。周造の口癖「そうさな」も、村岡訳の『赤毛のアン』に登場するマシュー・カスバート (Mathew Cuthbert) の口癖である。その他にも、実際には安中である花子の旧姓が「東のアン」を意味する「安東」とされていたり、伝記には全く登場しない、嗜好きの隣人リンド夫人 (Mrs. Lynde) を意識した木場リンや、ギルバートを意識した、教職を目指す木場朝一が登場するなど、様々なキャラクターが『赤毛のアン』との繋がりを強化するために付け加えられている⁽³⁸⁾。

さらに筆者が指摘したいのは、甲府時代の花子が小さな子供の世話をしながら実家の農業の手伝いをさせられたり、年季奉公に出されそうになったりする場面は、『赤毛のアン』というよりはむしろ、より近年2009年にアニメーション化され、より視聴者の記憶にあたらしいであろう続前編『こんにちはアン～Before Green Gables』において描かれた、アンがノヴァスコシアの複数の里親家庭ですごした幼少期に似せられている点である。2014年の朝の連続ドラマの視聴者には、中年となったかつてのアニメーション『赤毛のアン』の視聴者が多く含まれているであろう。そして彼らの中には子供と一緒に『こんにちはアン』を観たものも多いであろうから、シリーズ直近のアニメーションに言及する方法は有効と言えよう。

例えば、花子のライバルで勉強が苦手な地主の息子徳丸武は、『こんにちはアン』に登場する、勉強が苦手な牧場主の息子ランドルフ (Randolph) の姿を喚起する。カルヴィン・トリリン (Calvin Trillin) は、日本においてアンが支持される理由をアンの「自由な精神」(free spirit) に求めていると分析する⁽³⁹⁾。朝の連続ドラマの視聴者には、朝の8時過ぎに家にいる人々、つまりしばしば標準的な正規の雇用についていない人々、特に女性、が多いことを考えると、未だに父権主義的かつ封建主義的な日本において、貧しかった花子が令嬢を、さらには裕福な少年を追い抜いて成功していく物語は、孤児のアンが着実に成功していった様と同様に魅力的に映ったのではないか。

こうして、視聴者にアピールするべく綿密に企画された連続ドラマが、日加修好85周年記念の巡回展示、その他の村岡花子、プリンスエドワード島に関する企画出版物と相互に影響しあい、関東・関西両地区で20パーセントを超える高視聴率を獲得していくことは想像に難くない⁽⁴⁰⁾。ただ、我々は村岡花子を中心に打ち出したいずれの企てにおいても、アンがともにあったことを、忘れてはいけない。

おわりに

本稿は、日本において『赤毛のアン』出版100周年（2008）に関連して起こった様々な文化現象、特に2008～2014年に起こった『赤毛のアン』から村岡花子への注目の推移をまとめ、その過程で『赤毛のアン』の翻訳家や関連作家への影響力についても考慮し、『赤毛のアン』が日本で未だに保ち続ける「ちから」の一端を明らかにしようとした。

つまるところ、モンゴメリが『赤毛のアン』の原作*Anne of Green Gables*を二十世紀の初めに出版しなければ、村岡花子の翻訳も、アニメーションも、これらから波及した様々なビジネスも、21世紀最初の15年間にわたる『赤毛のアン』の再評価も存在しなかった。そして、この再評価が起こらなければ、その翻訳者である村岡花子への注目は2014年にこれほどの規模で起こらなかったであろうし、村岡姉妹や松本侑子といった関連する翻訳家や文筆業者が、この時代に前面に出てくることもなかったであろう。まして、学識の浅い研究者に過ぎない筆者が、このテーマについて研究することで、アメリカやカナダで報告する機会を得たり、拙稿にまとめることもなかったであろう。

本稿に見たように、100年以上前にセントローレンス湾に浮かぶカナダの一番小さな州で書かれ、隣国アメリカで出版された書籍に登場する一登場人物に過ぎない「アン」の、日本、そしてカナダにおける影響力は未だに大きい。2017年、カナダは連邦結成150周年を迎える。今年カナダは日本におけるカナダの広報活動に、『赤毛のアン』のイメージをいかに組み込むのだろうか。今年もカナダから目が離せない。

本稿は日本学術振興会の平成28～30年度科学研究費助成事業（若手研究B課題番号16K16788、研究題目「ポスト・インダストリアルのアトランティック・カナダ文学——リチャーズを中心に」）の研究成果の一部を含む。また、本稿は第21回Atlantic Canada Studies Conferenceで行われた、研究発表“Behind the ‘English-Atlantic Canadian Literary Renaissance’: The Power of Anne and the Aftermath of Her Centennial in Japan”（2016年5月6日、於・カナダ、ニュー・ブランズウィック州）および、Children’s Literature Association第43回年次大会における研究発表“Animating the Translator (s): The Power of Anne and the Aftermath of Her Centennial in Japan”（2016年6月9日、於・アメリカ合衆国、オハイオ州）で発表した情報をまとめたものである。ご協力いただいた、関係各所に御礼を申し上げる。

註

- (1) Lucy Maud Montgomery, *Anne of Green Gables* (Boston: L.C. Page, 1908). 村岡花子訳『赤毛のアン』は当初、三笠書房より1952年に出版された。現在流通している村岡花子訳の同書の中で最も一般的な書籍は、新潮文庫として2008年に出版された村岡美枝による改訂版であると思われる。
- (2) 村岡恵理『アンのゆりかご：村岡花子の生涯』（マガジンハウス、2008）。本稿の引用等では、2011年に出版された新潮文庫版を使用した。
- (3) 本稿では以下のDVDを使用した。加賀田透製作総指揮、『花子とアン』全13巻（アミューズソフト、2014）。テレビ放映の期間は2014年3月から9月まで。
- (4) なお2008年から2014年までは非常に多くの『赤毛のアン』関連イベントが行われたため、本稿が限られた紙面において、そのすべてに言及することは不可能であることをご理解いただきたい。なお、日本における出版100周年のイベントを網羅するウェブサイトとしては、個人運営の以下のウェブサイトが参考となる。『赤毛のアン出版100周年』2008, <http://anne.jpn.org/anne/index.html> (accessed 25 Jan 2017)。
- (5) カナダ大使館広報部の電子ニュースレター『カルチャー・カナダ』も、このイベントをはじめとして、当時の『赤毛のアン』関連のイベントに詳しい。4月25日のイベントに関しては以下が参考となる。Public Affairs Section, *Culture Canada* (April 2008), Embassy of Canada, http://www.canadanet.or.jp/p_ccnews0804.shtml (accessed 25 Jan 2017)。当時のニュースレターには日加修好80年を示すロゴが添えられている。
- (6) 本稿では以下のDVDを使用した。小坂春女監督『風の少女エミリー』全7巻（Vap, 2007）。テレビ放映の期間は2007年4月から9月まで。なお、アニメーションの原案となったモンゴメリのエミリー・シリーズの小説については、以下の通り。Lucy Maud Montgomery, *Emily of New Moon* (New York: Frederick A. Stokes, 1923) ; *Emily Climbs* (New York: Frederick A. Stokes, 1925) ; *Emily's Quest* (New York: Frederick A. Stokes, 1925)。
- (7) 吉村和敏『プリンス・エドワード島七つの物語』（講談社、2008）。吉村についてはその他にも、アトランティック・カナダ関連の作品集が多い。詳細は以下のウェブサイトを参照されたい。吉村和敏『写真家吉村和敏オフィシャル・ウェブサイト』2014, <http://www.kaz-yoshimura.com/index.html> (accessed 25 Jan 2017)。
- (8) Budge Wilson, *Before Green Gables* (Toronto: Penguin Canada, 2008)。翻訳は、宇佐川晶子訳『こんにちはアン』全2巻（新潮社、2008）。アニメーション版については、以下のDVDを使用した。谷田部勝義監督『こんにちはアン~Before Green Gables』全13巻（バンダイビジュアル、2009）。BSフジによるテレビ放映期間は2009年4月~12月まで。
- (9) 映画の劇場公開は2009年であったが、本稿では以下のDVDを使用。宮平貴子監督『アンを探して Looking for Anne』（クルル・ヴィジョン、2013）。
- (10) 高畑勲監督『赤毛のアン：グリーンゲールブルズへの道（劇場版）』（ウォルト・ディズニー・ジャパン、2010）。
- (11) 後援者等の情報は、2008年6月10~22日に銀座三越本店で行われた「赤毛のアン展」への招待券に記載された内容を参考にした。
- (12) 本稿は以下のDVDを使用した。高畑勲監督『赤毛のアン』全12巻（バンダイ・ビジュアル、2012）。テレビ放映期間は1979年1月~12月まで。
- (13) NHK取材班他『赤毛のアン・夢紀行：魅惑のプリンス・エドワード島』（日本放送出版協会、1989）。なお、本作品は2008年に復刻される。
- (14) 『NHKテレビ3か月トピック英会話「赤毛のアンへの旅」原書で親しむAnneの世界』4~6月号テキスト全3巻（NHK出版、2008）。同プログラムからは、ともに松本侑子の手になる以下の派生商品も提供される。松本侑子『赤毛のアンへの旅：あこがれのプリンスエドワード島へ』（日本放送出版協会、2008）；『赤毛のアンへの旅：秘められた愛と謎』（日本放送出版協会、2008）。

- (15) 姉妹が『アンのゆりかご』をはじめとして様々な文献で語っている通り、ふたりの母親みどりは、村岡花子の養女であり、生物学上は姪にあたる。よって彼らは、戸籍上は孫であるが、生物学上は村岡花子の大姪である。
- (16) Lucy Maud Montgomery, *The Blythes are Quoted* (Toronto: Penguin Canada, 2009). 邦訳は村岡美枝『アンの思い出の日々』全2巻(新潮社, 2009)、『アンの思い出の日々』翻訳のきっかけ等については、以下の翻訳専門学校フェロー・アカデミーのウェブサイト上の村岡美枝に対するインタビュー記事を参考にした。「贈ることで、心が伝わる。そんな本を子どもたちに届けたい」『Tramaga』318、フェロー・アカデミー、14 April 2014, <https://www.fellow-academy.com/fellow/pages/tramaga/backnumber/318.jsp> (accessed 25 Jan 2017)。
- (17) シンポジウムの原題は“Kindred Spirits : The Legacy of Anne of Green Gables”。
- (18) L.M.モンゴメリ『アンの愛情』松本侑子注訳(集英社、2008)。
- (19) 松本侑子の出版その他の活動の詳細は彼女の公式ホームページを参照されたい。自身のアン関連の書籍をまとめた「松本侑子さんのアンブックス9冊」と題されたページもある。『松本侑子ホームページ』1997, last updated 17 Jan 2017, <http://office-matsumoto.world.coocan.jp/index.htm> (accessed 25 Jan 2017)。
- (20) 松本侑子「古びない少女像」『MOE』14.1 (1992) : 14。「モンゴメリ没後50周年記念『赤毛のアン』に秘められた魅力」と題された特集記事は同7-33頁に掲載されている。『すばる』誌上の連載は14.5 (1992)~15.12 (1993) に掲載されている。
- (21) 松本侑子によるこの時期の注釈付き完訳は出版年順に以下の通り。L.M.モンゴメリ『赤毛のアン』(集英社、1993、2000)；『アンの青春』(集英社、2001)。松本がこの時期出版した関連エッセイは『誰も知らない赤毛のアン』(集英社、2000)；『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』(集英社、2001)；『赤毛のアンの今日が幸せになる言葉 : Anne Makes You Happy』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2001)；『アンの青春の明日が輝く言葉 : Anne Makes You Happy』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2002) と豊富である。
- (22) 「Anne's Story : アンは、母・村岡花子の青春そのものでした」『MOE』14.1 (1992) : 28。
- (23) 村岡恵理監修『村岡花子と赤毛のアンの世界 : 生誕120年』(河出書房、2013)。
- (24) 以下の日本放送協会のウェブサイトを参考にされたい。「朝ドラ『花子とアン』制作発表・主演は吉高由里子さん」『NHKドラマ』25 June 2013, <http://www9.nhk.or.jp/dramatopics-blog/1000/160065.html> (accessed 25 Jan 2017)。
- (25) 本稿は2014年6月14日から7月13日に開催された、北九州市立文学館の第16回特別企画展示「モンゴメリと花子の赤毛のアン展—日本とカナダをつないだ運命の一冊」の広告を参考にしている。
- (26) 2008年12月4日のイベントについては、Public Affairs Section, *Culture Canada* (Dec 2008-Jan 2009), Embassy of Canada, http://www.canadanet.or.jp/p_c/ccnews0812.shtml (accessed 25 Jan 2017) を参照。2014年5月21日のイベント「子供向けカナダの図書を読む会『赤毛のアン』」については以下のリンクを参考にされたい。*Embassy of Canada*, 2014, <http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/library-bibliotheque/reading-20140521-contes.aspx?lang=jpn> (accessed 25 Jan 2017)。以前、大使館ウェブサイトにはパトラーがこのイベントに参加した際に、村岡姉妹と再会した写真が掲載されていた。また同日、パトラーと村岡恵理は三越日本橋本店で行われた「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」のオープニング・セレモニーにも参加している。
- (27) 村岡恵理のサイン会が開催されたのは、4月に行われた大丸心齋橋店における巡回展示。北九州市立文学館で巡回展示が行われた際には「村岡花子と『赤毛のアン』の世界」と題して村岡恵理の講演会も行われた。
- (28) この時期に出版、復刻されたプリンスエドワード島ガイド・ブックが多い中で、特に興味深いのが、『ブルータス』別冊で男性読者をターゲットにした以下の書籍である。マガジンハウス編『赤毛のアンと世界一美しい島 : プリンス・エドワード島パーフェクトGuide』(マガジンハウス、2014)。

- 2008年以降は茂木健一郎や山田史郎らの著作や翻訳を通して『赤毛のアン』マーケットの辺境とも言えよう男性読者の開拓に力が入れられている。また、松本侑子も『赤毛のアン』のプリンスエドワード島紀行』(JTBブックス、2013) を出版している。
- (29) 2014年に出版された村岡花子のエッセイ集は五十音順に『想像の翼にのって』(河出書房、2014)；『腹心の友たちへ』(河出書房、2014)；『曲がり角のその先に』(河出書房、2014)。また童話集として、村岡花子『たんぼぼの目』(河出書房、2014)。
- (30) この時期に、村岡恵理が執筆ないしは監修した村岡花子関連の大人向けの書籍は以下の通り。村岡恵理監修『「花子とアン」への道：本が好き、仕事が好き、ひとが好き』(新潮社、2014)；『村岡花子：「赤毛のアン」の翻訳家、女性にエールを送り続けた評論家』(河出書房、2014)；『村岡花子の世界：赤毛のアンとともに生きて』(河出書房、2014)。この時期に村岡恵理は、以下に示す通り、子供向けの書籍も執筆しているが、これは次世代の読者の開拓のためであろう。村岡恵理文、わたせせいぞう絵『アンを抱きしめて：村岡花子物語』(NHK出版、2014)、村岡花子『「赤毛のアン」と花子：翻訳家・村岡花子の物語』(学研、2014)。
- (31) 『アンのゆりかご』については、あまり学術研究が進んでいないが、軽部恵子が書評として記した以下の文献は、ウェブサイトを中心に、参考資料が網羅しており、研究資料としての価値が高い。軽部恵子、「村岡恵理『アンのゆりかご：村岡花子の生涯』(新潮社、2011)』『桃山法学』第24巻(2014)：73-81。
- (32) 村岡、『「花子とアン」』、123。
- (33) 村岡、『ゆりかご』、273。
- (34) モンゴメリの人生については、以下の彼女の日記が残されているので参考にされたい。Mary Rubio and Elizabeth Waterston, eds, *The Selected Journals of L.M. Montgomery*, 5 vols (Toronto: Oxford UP, 1985-2004)。
- (35) 村岡、『ゆりかご』、285。
- (36) 前掲、377。ここでは恵理は言及していないが、震災による事業の失敗や息子の死など、度重なる不幸により失意に沈むことの多かった家庭を、文筆業による収入で支えていた花子と、薄給で精神的不調を抱えた牧師である夫と子供を、作家としての収入によって支えていたモンゴメリの姿が重なる点は指摘できよう。モンゴメリの人生に関しては、以下の文献にも簡潔にまとめられている。Mary Henry Rubio, “Montgomery, Lucy Maud,” in *Encyclopedia of Literature in Canada*, ed. W.H. New (Toronto: U of Toronto P), 2002, 748-51。
- (37) Janice Fiamengo, “Towards a Theory of the Popular Landscape in *Anne of Green Gables*,” in *Making Avonlea: L.M. Montgomery and Popular Culture*, ed. Irene Gammel (Toronto: U of Toronto P), 2002, 228。
- (38) 参考にしたスタッフブログは以下の通り。「『花子とアン』 #10』『NHKドラマ』 4 April 2014, <http://www.nhk.or.jp/drama-blog/4030/183998.html> (accessed 25 Jan 2017)。
- (39) Calvin Trillin, “Anne of Red Hair: What Do the Japanese See in *Anne of Green Gables*?,” in *L.M. Montgomery and Canadian Culture*, eds. Irene Gammel and Elizabeth R. Epperly (Toronto: U of Toronto P), 220。
- (40) 『「花子とアン」半年間の平均視聴率22.6% 『ごちそうさん』越え&過去10年で最高』『Oricon News』 29 Sept 2014, <http://www.oricon.co.jp/news/2042684/full/> (accessed 25 Jan 2017)。